

中世丹南における職能民の集落遺跡

— 鑄造工人を中心に —

鋤柄俊夫

はじめに	3 河内鑄物師の存在形態
1 河内丹南の鑄造関連遺跡	4 結 言
2 丹南の中世村落	

論文要旨

大阪府南河内郡美原町とその周辺の地域は、特に平安時代後期から南北朝期にかけて活躍した「河内鑄物師」の本貫地として知られている。これまでその研究は主に金石文と文献史料を中心にすすめられてきたが、この地域の発掘調査が進む中で、鑄造遺跡および同時代の集落跡などが発見され、考古学の面からもその実態に近づきつつある。

ところで従来調査されてきた奈良時代以降の鑄造遺跡は、寺院または官衙に伴う場合が多く、分析の対象は梵鐘鑄造土坑と炉または仏具関係鑄型とスラグなどが中心とされていた。一方河内丹南の鑄造遺跡についてみれば、鍋などの鑄型片および炉壁・スラグ片は一般集落を構成する遺構群の中から出土し、炉基部をはじめとする鑄造関連施設の痕跡もその一部で検出される。これらは鑄造施設をともなった中世集落遺跡の中の問題なのである。そしてこの地域の集落遺跡は、河内丹南の鑄物師の本貫地であったという記録と深く関わっている可能性が強いのである。

小論はこの前提に立ち、丹南の中世村落を復原する中で特に職能民の集落に注目し、それが文献史研究の成果により示されている河内鑄物師の特殊な社会的存在とどのように関わってくるのかを考えたものである。

考察は中世村落研究と鑄造遺跡研究の2点に分けられる。前者では、灌漑条件を前提とした歴史地理と景観復原の方法から村落の成立環境を、文献記録と遺跡の数量化分析から村落の配置と規模および古代から近世にかけての移動を復原した。後者では、全国の鑄造遺跡の整理から遺構の特徴、日置荘遺跡の検討から遺物の特徴を抽出し、鑄造作業における不定型土坑と倉庫空間の重要性および、鑄造集団がもつ特殊な流通について指摘した。

これらの分析から、丹南の村落は成立環境の異なる条件により、少なくとも2つの異なった変化過程を示す可能性があり、それぞれに付属する鑄造集落においても同様な傾向のみられることがわかった。この仮説について、小論では日置荘遺跡をモデルとした鑄物師村落の景観復原を例に提示しておいたが、丹南鑄物師の2つの系統との関連の問題とあわせて、今後社会的に復原検討されるべき課題とされよう。